

## 専大社研 2016 年度夏季実態調査（タイ・ラオス・ベトナム） 行程概要ミニ・フォトエッセー

大矢根 淳

### 1. はじめに

2016 年度夏季実態調査は、「メコン圏視察調査：タイ、ラオス、ベトナムの農村部と少数民族」をテーマとして企画・実施された。同実態調査企画の段階において所員に示された趣意書から一部を抜粋する。

近年、社研では、ベトナム特に、ベトナム社会科学院（VASS）との国際交流を活発に重ねて来ている。2012 年 2 月にベトナム社会科学院東北アジア研究所と国際交流組織間協定を締結し（2015 年 1 月 17 日、協定更新）、翌 2013 年 9 月には、専大社研・ベトナム社会科学院共同開催「日越外交関係樹立 40 周年（1973 - 2013）記念シンポジウム『日越関係：40 年の回顧と将来の方向性』」を開催し、2014 年度末には、ベトナム南部を対象とした実態調査を実施している。そして今年度は、ベトナムを含むメコン圏三国を横断する実態調査を企画した。

今回の実態調査は、タイ、ラオス、ベトナムの農村部や少数民族の村を訪問し、各国の社会・経済の現状と課題を地方の視点から理解するものとなっている。国際援助による国際道路網・架橋事業など、近年整備された国際交通網を辿り、インドシナ半島の上記三カ国を専用バスで陸路横断・走破するという企画で、個人調査出張では実現し難い行程が設定されている。援助機関や民間企業などの諸活動の視察を通して、開発のありかたについて考察する。また、これらの地域は辺境の地とされている一方で、東南アジアの中でも主要な初期王朝が栄えた歴史遺産の豊かな地域で、更に、フランス植民地時代の影響や、ベトナム戦争時のホーチミン・ルートなどに見られるように、近現代史の中で翻弄された地域でもある。本調査を通して、変化のただ中にある三カ国の農村部について、その多様な歴史をふまえて現在の諸相を探求する。

事前学習として、7 月 19 日（火）午後、生田社研会議室で定例研究会「タイ、ラオス、ベトナムの農村部と少数民族」を開催し、講師に米坂浩昭氏（アイ・シー・ネット株式会社、顧問）を招いた。

米坂氏は、東京水産大学を卒業し、その後、ロードアイランド州立大学（修士）、さらに、イタリア・ジョンカボット大学開発経済学特別コースに入学・修了している。帰国後は、国際協力事業団に勤め、その後、異動して東南アジア漁業開発センター（水産社会経済専門家）、国際農業開発基金（プロジェクト・コントローラー）を経て、アイシーネット株式会社・代表取締役、現職として経営顧問に就いている。ラオスの南部パクセに拠点の一つを置いて日本と行き来し

つつ、村落、少数民族との関わりを深め、その知見を、今回の社研の現地研修のような形で還元している。昨年度にはこの雛形になるような立教大学の短期留学プログラム（タイ・ラオス・ベトナム編「東西経済回廊を巡り日本と東南アジアの未来を考える」）を企画・実施している。

今回の社研実態調査では、内容的には学部学生向けのこうした短期留学プログラムからさらに一步踏み込んだ企画として組み上げていただいた。アセアン経済共同体（AEC）加盟国・インドシナ三国を陸路横断しつつ、一村一品運動に取り組む少数民族の集落、地元大学、市行政を訪ねることとなった。専門性においてバラエティに富む社研所員一行からは、訪れた現場で次から次へと止まることなく質問が投げかけられ、また、現場の視察の足は必然的に多様に（個々身勝手に）展開するところとなり、さらには折からの豪雨によって視察先を適宜変更しなくてはならないことも重なり、米坂氏には行程の適切、臨機応変な組み替えを行っていただいた。毎日 6～7 時間のバス乗車というハードな行程であったにも関わらず、一人の途中リタイアを出すこともなく行程を完遂できたのは、こうした現知事情に詳しく視察調査旅行のノウハウの蓄積の厚い米坂氏のおかげによる。改めて厚くお礼を申し上げたい。

なお定例研究会当日は、研究会枠での米坂氏の講演、質疑とともに、当実態調査旅行の企画に携わる HIS 担当者も来校して、行程概説と各種準備について説明を行った。

以下、今回の実態調査の行程をミニ・フォトエッセーとして記しておくこととする。

## 2. 実態調査の行程

### 2-1. 第一日目（9月11日）：成田からタイ・バンコクを経てウボンラチャタニへ

午前 11 時発のバンコク行きタイ航空・TG641 便に搭乗すべく、社研一行は 9 時に成田空港第一旅客ターミナル（旧・南ウイング）集合となり、最近では主流となりつつある電子チェックインを各自こなして、搭乗時間を待った。成田からはアイシーネットの中山愛実氏が添乗。搭乗機はエメラルドグリーンの沖縄・石垣島、ベトナム・フェのラグーン上空を順調に飛行して、バンコク着。ここで 2 時間ほど乗り継ぎ時間を待ち、再搭乗してウボンラチャタニ空港に着いたところで、今回、現地・三国横断の旅（地図 1）をご案内いただくことになる米坂氏に出迎えていただいた。一同驚愕したデコトラ風・超豪華二階建てバスでホテルにチェックイン。



地図 1 2016 年度夏季実態調査訪問地 (Google マップより)

一息ついて、タイ料理の夕食となった。恒例では結団式を兼ねた夕食となるところだが、同レストランでは歓迎の生バンドの演奏が続いたことで、結団式は翌日以降に持ち越されることとなった。これからタイ、ラオス、ベトナムと、国際道路を西から東に向かって二つの国境を越えるバスの旅となる。タイの香辛料の利いた (人によっては辛〜い) 料理が、東に向かうにつれて次第にまろやかな味に変容していくことも合わせて体得できることだろう。今宵は激辛の品々を堪能した。

## 2-2. 第二日目 (9月12日) : ウボン大学でのレクチャーから国境を越えて世界遺産へ

各自、ホテルで朝食を済ませ、一行はバスでウボンラチャタニ大学でのレクチャーに向かう。同大学経営管理学科の学科長・スマート助教授にご挨拶をいただいた後、スックスム常任教授 (写真 1) から「ウボンラチャタニ県経済状況」について、その概況と隣国ラオスとの事業展開の現況、首都バンコクと地方都市ウボンラチャタニ県の比較分析を概説いただいた。同教授の英語報告・PPT 内容は平澤信吾氏 (UbonThai Welder Manpower Co., Ltd.) によって丁寧に翻訳されて配布された。米坂氏は、十八番のラオスについてはご自身がコーディネート・案内を担い、ラオスに至るまでのタイ国内、特にその農村部については、平澤氏が現地案内を。平澤氏は、茨城県の鯉川学園農業栄養専門学校を卒業後、同校交換留学生として、タイ王国立タマサート大学に研修科として 1 年所属して、タイ全土の農家に泊まり込み土壌肥料を研究された。そ



写真 1



写真 2



写真 3

の間、現在の勤務会社の社長と出会い現地採用。日タイの架け橋として異国で孤軍奮闘、奔走している。昼食後はウボンラチャタニの農家を訪ねた。農業事情に詳しい平澤氏のガイドで、篤農家の取り組みを拝見した（写真 2）。田植え手法のバリエーション、肥料の開発、多品種実験などを重ね、多くの視察を受け入れている、数多くの受賞歴を誇る農家であった。

ここから国境を越えてラオスに向かう。途中、トイレ休憩で立ち寄ったのは、自給自足で集団生活を営むアソック仏教団の集落（写真 3）。街道沿いのタイ料理レストランで、タイ最後の昼食。

さて、いよいよ陸路最初の国境越えとなる（写真 4）。ポーターが我々一行の大型荷物を人力リヤカーで運んでくれている間、出入国手続き。地下道を通って国境を渡ると、これからラオスを横断してベトナム国境までお世話になる赤い観光バスが待ち構えていて、先ほどのポーターが我々の荷物を積み込んでいた。この間、10 数分。いたってスムーズ。タイの出国、ついでラオスへの入国と、数 10m 歩いての国境越えは、ただただ新鮮で驚きの体験。国境を越えてラオスに入ると、一気に長閑な風景。各種野菜に加えて、カタツムリやコウロギ、カエル、それに水牛の皮まで、路上販売。

国境を越えて一行は、世界遺産・ワットプーへ。入り口から丘の麓までは電動カートの送迎があって、一安心。この暑さの中、さてこれから歩くと思って覚悟を決めていたところだったので、救われた気持。カートを降りて残りは自力登山。希望者は汗まみれになって急な石階段を



写真 4



写真 5

登り切り、絶景を堪能して（写真 5）何とか下山。

パクセのホテルにチェックイン。急ぎシャワーで汗を流して夕食へ。ラオスでの最初の夕食は水上レストランで、地元ビールで乾杯。社研一行には食品ブランドを攻究する者もいて、こうして三国横断バスの旅では村々でそうした品々の解説もまた楽しい。

今晚からパクセのチャンパサック・パレスホテル(チャンパサック王国の宮殿を改装したホテル)に連泊となる。

### 2-3. 第三日目（9月13日）：少数民族と一村一品運動

昨晩から降り続く雨は、朝から豪雨となった。三日目からはいよいよ、少数民族の村々を巡る。サラワン県ラオガム郡ホアイフンタイ村、カトゥ族の集落に着いて高床式の集会所に案内されると（写真 6）、次々に女性達が自ら織った布を持ち寄る。一人は、織るところを実演してくれる。気に入った布を手にとって、「これを織ったのは誰？」とたずねると、すかさず製作者が名乗り出て、品物の説明と値段交渉（写真 7）。一村一品プロジェクトの支援対象村で、多摩美術大学が工芸品などの改善・考案に 6 年に渡り協力している集落。

昼食はパクソンの「ヘルシー」を売りにするラオス料理店。ここでラオスで作られている黒米焼酎（「オーガニック農法で作られた黒米を使ったラオス最高級の焼酎」とのこと）に出会った（写真 8）。翌日、米坂氏が数本調達してくれて、希望者がお土産に購入。



写真 6



写真7



写真8

豪雨の影響で、当初予定していた訪問先をいくつか変更した。チャンパサック県パクソン郡で訪問を予定していた有機農法イチゴ栽培は飛ばして、コーヒー工場、ラオ・タイホア・コーヒー会社をたずねた。高地栽培のこのラオ・コーヒーは、丸紅の仲介で、バンコク経由で日本にも輸出されているという。コーヒーをいただきながら会議室でレクチャーを受けた後、工場見学へ（写真 9）。ほどなく収穫が始まり稼働開始する工場は、今はまだ閑散としていて、機材の修繕作業が行われていた。

大雨も少しずつ小降りとなったが、あちこち冠水する道を通り（写真 10）、フェアトレードのコーヒー屋、ジェイハイ・コーヒーハウスで小休憩。事業経緯やコーヒーショップ経営についてうかがった後は、一杯一杯、丁寧に淹れる極上のコーヒー（写真 11）を堪能した。

ここから次の訪問地までのバス車中、今回の実態調査でやっと自己紹介の時間をとることができた。

夜はパクセで、ピザをメインディッシュとする夕食。そろそろ体も胃も疲れてきただろうとの米坂氏の配慮で、気のせいかな本当に久しぶりの西洋料理。タイから東に向かって次第に味もマイルドになり、地元ビールとの相性も良く、食も進む。毎日数時間のバスの長旅であるが、米坂氏の行程配慮のおかげで、ここまで体調を崩す者もなく、順調に進んでいる。食後は、米坂氏ら日本からの開発援助チームが行きつけとする日本居酒屋で二次会に移動する組、あるいはマッサージのオプションが紹介された。ミニ登山にバスの長旅。老体にマッサージはありが



写真 9



写真 10



写真 11

たい。

#### 2-4. 第四日目（9月14日）：日本企業アスパラガス農園からベトナムに向けて国境越え

今朝はやっと雨も上がり、ホテル屋上からの眺めが素晴らしいことがわかり（写真 12）、一同、階上へ。

ホテルからバスで数分のところにある市場を視察（写真 13）。近郊から乗り合いバスで買い出しに来るといふ。我々の走る国際道路はラオス・サイドはほぼ綺麗に舗装はされているものの、側溝の処理までは進んでいない。昨晚までのような大雨が降ると、道から家、家から道には渡れなくなる。ただ木っ端を渡しただけの簡易な私橋があるのみ（写真 14）。この点は、翌日から走るベトナム・サイドの事情と比較してみると一目瞭然。

休憩に立ち寄ったのは、シヌーク・コーヒー・リゾートの庭園コーヒー・ショップ。ひと時の優雅な時間を過ごした。

午前中最後は、Advance Agriculture Co., Ltd.が経営するアスパラガス農園を訪問。現地で奮闘する同社の伊藤俊介氏、宮下信氏にレクチャーしていただいた。オクラからはじめて、今は国際航空運賃をかけても採算のとれるアスパラガスの栽培に辿り着き、今でも次から次へと様々に工夫を加えているという。女性労働者が多く、ちょうど昼食時で、その輪に入ってご馳走になった所員も（写真 15）。

昼食は車内で、米坂氏が現地調達してくれたおにぎりをほおぼる。

次いで午後はまず、セコン県タテン郡でカトゥ族の集落を訪問。村長さんに少数民族の文化、行事や集会所の構造などをうかがった後、村内をご案内いただく。各戸の高床式納屋の軒下に



写真 12



写真 13



写真 14



写真 15

用意された棺桶を見せていただきながら、葬送儀礼についてもうかがうことができた。

小休止をとったのは、アタプー国際空港横のガソリンスタンド。ここから東に向かって山を越えればベトナム国境で、すぐ右横、方角では南に連なる山々が、もうそこはカンボジア国境である。このあたりはベトナム資本のゴムのプランテーションが延々と続く。こうしたベトナム資本の象徴のようにこの空港がここにあって、この新空港建設はベトナム資本・コンストラクターによるもの。

バスは山間路に入る。かつてベトナム戦争時にはホーチミンルートが貫かれていたこの山間



写真 16



写真 17



写真 18

部には、現在でも数知れないほどの不発弾が埋まっているという。現在では木々・草々に覆われて、ホーチミンルートは歴史に埋もれつつある。現在では、そのそこかしこで森林が伐採されて一部製材され、あるいは丸太のまま、大型トラックで続々とベトナムに運ばれる(写真 16)。

夕方、国境を越えてベトナム・コンツム省、Bo-Y にて入国(写真 17)。前回のタイ→ラオス国境越えに比べて、大変時間がかかった(所要約 1 時間)。ベトナムに入って市街地に達すると、そこでは中秋の名月を祝うお祭りがあちこちで行われていて、幹線道路はそれをバイク 3～4 人乗りで見物する人たちで大渋滞(写真 18)。夜 9 時前、やっとコンツムのインドシン・ホテルに着。ホテルではヴォ・ニュ・タン氏が迎えてくれた。明日からダナンをご案内いただく。米坂氏は、ダナン案内はタン氏に一任。タン氏は長年日本に留学して建築を学び(明石高専、豊橋技科大卒、技建設計(株勤務)、帰国して現在は建築、各種企画・コンサルタントを行う ONEDANA(ワンダナ)株式会社・取締役副社長。

## 2-5. 第五日目(9月15日): コンツム(少数民族の開拓移住の村)から大都市ダナンへ

コンツム市内の木造教会(写真 19)を見学した後、バスを橋のたもとで降りて、タクシー4台に分乗して細い橋を渡ってコンツム市のバナ族の集落をたずねた。前村長と村の長老が開拓移住・開村してきたこの数十年の歴史と村の社会・機構について語ってくれた。村の集会所は現在、改装中の小学校の代替校舎となっていて、子ども達が休み時間、元気に走り回っ

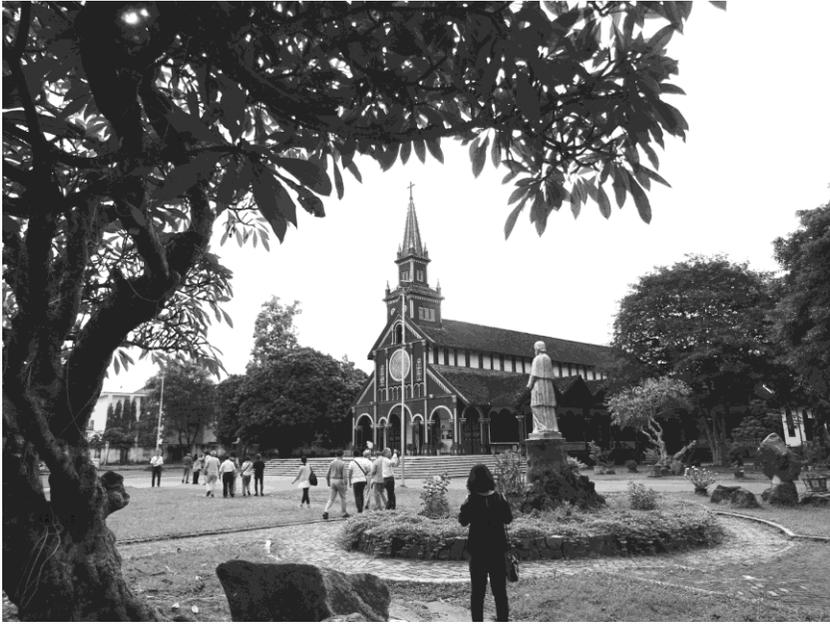


写真 19



写真 20



写真 21

ている（写真 20）。

コンツム刑務所跡・資料館をめぐり、クワンナム省ナムザン県コムドックに入って大衆食堂で昼食、その後、一度、ドライブインでコーヒー休憩して（写真 21）、同県パ・ロング村の集会所を見学して、夕刻、ダナン（ベトナム第三の都市）着。

ダナン海岸のオープンテラスのシーフードレストランで中秋の名月を愛でながら夕食。昨晩に続き、市内あちこちでお祭り騒ぎの大渋滞。ダナンの中心にあるミントアン・ホテルにこれから二連泊。

## 2-6. 第六日目：世界遺産巡りとダナン市役所訪問

朝、バスはリゾート開発の進むダナンの海岸線を左に見てしばらく走って右折し、山中に向かう。世界遺産・ミソン（美しい<sup>ミ</sup>山<sup>さん</sup>）<sup>ミソン</sup> 遺跡を見学。

農村の道中、収穫したトウモロコシがそこかしこで天日干しされている（写真 22）。昼食は川沿いの庶民的なレストランで、野菜たっぷりの麺。ホイアン旧市街（「ホイアンの古い町並み」としてユネスコの世界文化遺産に登録）を散策して日本橋（1593年に日本人が作ったと言われている「来遠橋」）前で一同、記念撮影（写真 23）。

午後 3 時過ぎ、ダナン市人民委員会を訪ね、ダナン市投資促進センターのヴォ・ティ・マイ・フォン氏に「ダナン市への投資」について現況をレクチャーしていただいた。氏はプロジェクト



写真 22

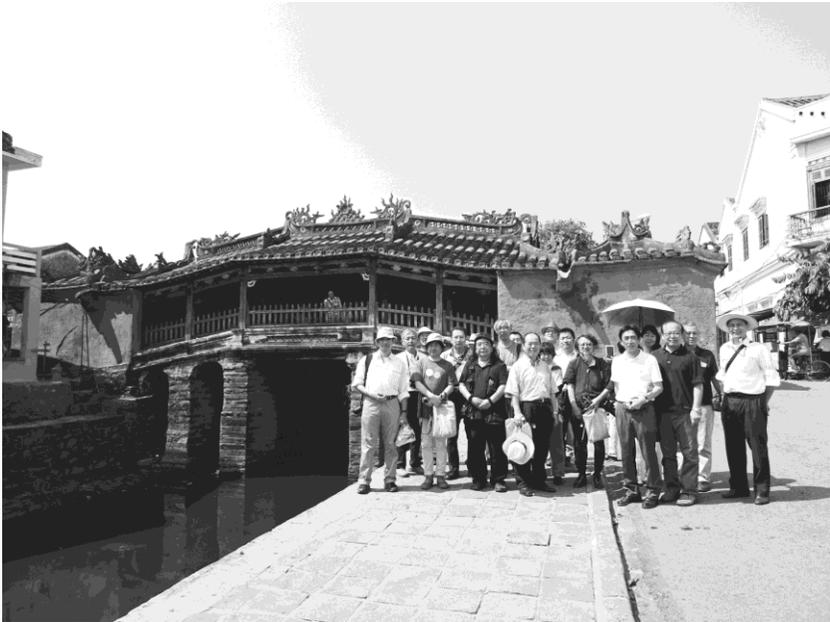


写真 23

開発部・ジャパンデスク担当で、日本留学（立命館大学）で身に着けたとても流暢な日本語による明確な説明に所員一同、理解を深めることができた（写真 24）。

その後、夕方、役所となりの博物館を見学。

夕食はホテル近くでバイキング料理。実態調査最後の夕食で、所長の総括・挨拶で実態調査の締めくくり。



写真 24

## 2-7. 第七日目：魚市場訪問から帰国の途へ

希望者を募り、まだ明けやらぬ早朝 5 時半ホテル出発で漁港・魚市場視察。多くの漁船が横付けされた魚市場では、見渡す限り、働いているのは女性ばかり（写真 25）。7 時前にホテルに戻り、シャワー浴びてチェックアウト。

帰国便は約 1 時間遅れで正午ダナン発、ハノイで乗り継ぎ、夜 7 時過ぎ成田着。荷物引取りターンテーブル横で簡易に解団式、銘々帰路についた。



写真 25

### 3. おわりに

今回の夏季実態調査は、春に企画素案を持ち寄り、その時点では、英国案とこの ASEAN 案が並立していた。同地域をフィールドとする社研事務局・研究会担当の飯沼健子教授が中心となって、アイシーネットおよび HIS と詳細に企画案を煮詰めてくれたことで、今夏はまず、ASEAN 三国企画を進めることとなった。そこから、三国横断バスツアーとなること、したがって、仮称第二・第三の東西回廊に沿って高原を越えて少数民族の集落を巡ること、それに即してバスの安全・快適さ、ホテルおよび食事のバリエーションまで、我々社研所員一行の年齢・体力、嗜好を勘案しつつ、十二分に相談・交渉を重ねてくれた飯沼先生に、この場を借りて深く感謝!!

社研実態調査これまでにない、紙上・字面では過酷な行程ではあったが、経験豊かなアイシーネットの適切な計らい、社研事務局研究会担当の十分な申し入れのおかげで、安全な有意義な実態調査となった。これを経験・完遂したことで、次にはまた別の回廊を辿ってみたいとの声も聞こえてきている。

#### 参考文献等

JICA, 2012, 『ラオス国南部地域経済開発に係る情報収集・確認調査ファイナルレポート』  
([http://open\\_jicareport.jica.go.jp/pdf/1000023020.pdf](http://open_jicareport.jica.go.jp/pdf/1000023020.pdf))。

箕面在弘, 2014, 『フェアトレードの人類学: ラオス南部ボーラヴェーン高原におけるコーヒー栽培農村の生活と協同組合』 めこん。